

学会の顔“論文集”を会員皆のものに

伊藤 学



しばらく前からほとんどの工学関連学会において論文集の見直しははかれ、いろいろな工夫がこらされるようになった。わが土木学会もその例外ではなく、学会誌を含めた定期刊行物検討委員会が設けられ、私とその取りまとめを

仰せつかった。その結果、各委員の熱心な審議によって実現したのが、部門ごとの分冊化、研究（技術）展望・招待論文などを加えた編集努力、そしてこの第VI部門の新設であった。第VI部門に限らず、工学の論文なるものは、大学や研究所の人達の理論や実験を内容とするものばかりでなく、もっと多様であるべきだと私は思う。事実、すぐれた土木技術の成果は在来の学会論文集への寄稿者以外の人びとの手に成るものが多く、それらの成果が獨創性ある技術開発、ユニークな手法に基づくものであることはいうまでもないからである。それらの人びとが学問に縁がないと称し、論文集に関心を示さないとしたら、工学の学会としては真に奇異といわざるを得ない。

前述の背景のもとに誕生した第VI部門論文集の編集にあたられてきた初代小委員長の故湯田坂益利氏（私どもの検討委員会の委員でもあられた）をはじめとする歴代委員各位のご苦勞には深い敬意を表したい。その跡はこれまで4号の編集に歴然と現われている。しかし、この新しい試みを軌道に乗せるために、生みの親の一人と自認している私としては、この機会に一つ注文を呈したい。それは、学会誌との性格分けをここで明確にすべきではないかということである。すなわち、学会誌に以前から投稿され、掲載されてきた記事のうち、計画・設計・施工それに技術開発の報告は、それが獨創的かつ専門的内容であれば立派な論文なのであるから論文集に回していただき、逆に、座談会・ニュース・寄書などは会員への啓蒙、コミュニケーションを目的としたものとして学会誌が扱う方がよいのではないかと考える。それにはまず、この第VI部門論文集に多くの論文を積極的に投稿していただくことが必要である。日本の土木技術がこれだけ世界に冠たる業績をあげているからには、編集委員会が悲鳴をあげるほどの寄稿があつておかしくないと思うが、現実にはなかなか難しい事情もあるようである。たとえば、発注者と受注者の関係、大多数の技術者の学

会に対する認識などである。しかしこれらの点についても、土木界の近代化をめざした意識の変革を望みたい。学会は学者だけのものでも、役所とか会社といった組織のものでもなく、Society of Civil “Engineers”なのである。その顔である論文集に登載される成果こそ、最も高い評価を受けるという認識をもっていたらいいと思う（英文論文も歓迎している）。

（筆者・Manabu ITO, 東京大学教授 工学部土木工学科）

3年目を迎えた第VI部門論文集に望む

岩崎 訓明



私は過去に2度、昭和43、44年度と54、55年度に論文集編集委員会に籍を置いたことがある。特に最初のときは論文集が論文報告集に改称された時期（第161号、1969年1月）に当たっていた。このときの改訂は、論文という名称にとらわれて原稿の傾向が一方に偏するきらいがあり、会員が土木工学に関して行った研究の成果を互いに交換して専門學術および技術の進歩と相互の利益に役立たせる、という目的が十分に達成されていないのでこれを是正しようとするものであった。この改革により学問技術に役立つ研究、調査、工事報告に関する論文、資料などを広く、かつ積極的に掲載し、英訳名もTransactionsからProceedingsに改められることとなった。

一方において、論文集は土木学会の顔であつて、わが国の土木界の最高水準の論文のみが掲載に値する、とする意見もあるが、きわめて専門の近い一握りの研究者にしか読まれない難解な論文ばかりが載っていて、一般の会員には無縁に近いのでは、全会員のものであるべき学会の刊行物の本来の目的から遠く外れていると思われる。

編集委員会その他の組織において、その後も絶えず論文集のあり方についての検討がなされてきたが、今回の第VI部門の創設は、この流れを大きく前進させたものといえる。

雑誌や新聞のイメージや評価は、刊行の趣旨などを読んでもなかなか明確にはならないものであつて、それらを購読している間に自然に固まってくるものであろう。その意味において、既刊4冊は第VI部門論文集の今後の方向を定めるもので、編集ならびに執筆に携わった人々